

桂浜たより 第四号

(桂浜を守り育てる会—桂浜水族館応援団—会報)

＜浦戸の歴史と文化③＞

近代浦戸観光の忘れ物“自然・史跡・未来”

中城 正堯

激動の波打ち寄せる幕末・維新の浦戸港

山内一豊の浦戸入城と湾内視察を記念して始まった1月8日の土佐藩乗初式は、後に16日に変更となったが幕末まで続いた。この日、吸江（高知市）で乗船した藩主や重臣は、ほら貝を合図に陣容を整えて浦戸へ向かって漕ぎ出し、到着後は浦戸御殿（観海亭）に入って儀式を行った。航海中は船頭が櫓拍子に合わせて高らかに御船歌をうたったが、その一つ播磨吟は、「やんれ千代の春、御代をお舟のお乗り初め、飾り立てたる松の下、鶴と亀との齢にて、幸い心をまかせつつ、御座船に召せば・・・」と続く目出度いものであった。

参勤交代で江戸に向かう藩主が、浦戸を船出して海路大坂まで乗船する御座船は、25反帆・水主84人で、これに閑船や小早と呼ばれる軍船が付き従った。御座船の勇姿は、「土佐藩御座船図」に描かれている。軍船は風がなくても運航できるように、櫓を多数備えていた。しかし嘉永6年(1853)、浦賀へのペリー来航によって泰平の夢は破れ、和船の時代は終わる。土佐藩でも1863年に蒸気で走る内輪船「南海丸」を購入、船奉行も改革し、軍艦奉行となる。慶応2年(1866)には、南海丸に替え「夕顔」を所持する。

夕顔は慶応3年6月に、長崎から京に向かう後藤象二郎・坂本龍馬が乗船し、「船中八策」を起案したことで知られる。この7月には長崎で英国人水夫2名が暗殺されたイカルス号事件の嫌疑が海援隊士にかかり、英国公使パークスや外交官アーネスト・サトウが英国軍艦で須崎港に来る。夕顔の船上で行われた土佐藩との談判は、水掛け論に終わる。坂本龍馬も薩摩の蒸気船で須崎に来ていたが、脱藩を許されたばかりで談判に加わることは出来ず、船中に潜んだままだった。後に、真犯人は筑前福岡藩士と判明する。龍馬は9月に震天丸で浦戸湾に来航、種崎に潜伏後、上町の実家に帰宅、これが最後の帰郷となった。

アーネスト・サトウは談判後、前藩主・山内容堂に高知の城下へ招かれ、用意された藩船で向かう。

彼の回想録『一外交官の見た明治維新』（岩波文庫）には、浦戸の様子がこう記されている。「九時半過ぎに、船は浦戸に投錨した。はるかかなたに小山がつづいている。海岸沿いに生えている帯のような松並木の景色は、私にはセイロン島のポアン・ド・ガル湾をまざまざと思いおこさせた。高知湾（浦戸湾）は出入口がきわめて狭隘で、岩礁が多く、湾とは言うものの実際には一つの入江をなしている。船は砂浜に向かってまっすぐ走っていたようだが、やがて急に左に転じて船首を川の中に入り、小さい入江の内側の水深15フィートのところに碇をおろした。・・・私は屋形船に移ったが、すこぶる船脚が遅かった。二、三の広い湖水のようなところを過ぎると、やがて高知の城が見えてきた」。こうして、九反田に新しく建てられた開成館で容堂公と対面、皿鉢料理の接待を受ける。

彼は帰路の様子をこう述べている。「ゴンドラに似た舟で浦戸まで戻ったが、その途中群衆が小舟で追ってきた。彼らは、1596年にスペインの大帆船が漂着して以来、初めてこの地方に出現したヨーロッパ人をしきりに見たがっていたのだ」。

この記述から、次のことが読み取れる。1. 浦戸湾には大型蒸気船は入港困難で、須崎港で藩船に乗り換えて浦戸（現浦戸漁港）に着岸、さらに屋形船で浦戸湾を渡って城下に向かった。2. 長宗我部元親時代の巨艦サン・フェリーペ号漂着事件は、この英国人も地元民も今に記憶する大事件であった。土佐藩乗初式の復活と、歴史を彩る和洋船舶模型の製作展示は、今後の課題である。



図1

名月と大海原に魅せられた文人たち

山内家の時代になって土佐藩の居城が高知城となり、四国の勇将・長宗我部元親の本拠であった浦戸は、山内家の別邸浦戸御殿と藩船基地が置かれたものの、静かな漁村にもどった。明治維新後に、浦戸城跡も浦戸御殿も民間に払い下げられ、明治16年には竜頭崎に灯台が設置された。22年の町村制施行で、浦戸・桂浜・南浦からなる浦戸村が誕生、2年後の戸数345、人口1,739で、漁業と水産加工が中心であった。旅客船の大型化とともに、海の玄関としての役割は次第に潮江の新棧橋「高知港」へと移っていった。

だが、浦戸の城山に登れば、南は異国につながる雄大な太平洋、北は穏やかな水面に島影と白帆が浮かぶ浦戸湾、眼前には浦戸城の天守台跡や縄張遺構の数々が残り、ロマンをかき立てた。浜辺に降りれば五色の小石に白波が寄せ、潮風が心地よかった。この自然と史跡が織りなす景観美に、多くの文人が心を惹かれた。

まず物理学者・随筆家の寺田寅彦で、「高知がえり」（明治34年）に須崎からの汽船での入港風景がこう記されている。「だいぶ浦戸に近よった。…浪がないから龍王の下のおどる白波の壮観も見えぬ。釣船はそろそろ帆を張って帰り支度をしている。沖の礁を廻る時から右舷へ出て種崎の浜を見る。…伝馬船に乗って櫂を動かしている女の腕に西日がさして白く見える。どうやら夏のようにも思われる。貴船社の前を通った時は胸が痛かった」。夏とは寅彦の新妻・夏子であり、結核になって種崎で療養していた。やがて桂浜に転居、寅彦は何度か見舞ったが、35年11月に息を引き取る。評論家・山田一郎は、寅彦は夏子がまだ元気だったころに桂浜で二人して五色の石を拾い、恩師・夏目漱石に贈ったことを、漱石全集の俳句から見付け、桂浜に「師弟唱和」の文学碑を建てたいと提言している。碑文案は「寅彦桂浜の石数十顆を送る（涼しさや石握り見る掌 漱石）、〈朝霧に燈台の灯の残りけり 寅日子（寅彦の俳号）〉」であり、実現が望まれる。

ついで随筆家・大町桂月である。明治・大正の紀行家・評論家として名高く、「みよや見よみな月のみのかつら浜 海のおもよりいづる月かげ 大正七年かく」と刻んだ「大町桂月記念碑」がある。雅号・桂月は桂浜にちなんだものであり、月の名所・桂浜によほど親しんできたように思われがちだが、実はこの大正7年が38年ぶりの高知帰郷であり、愛弟子・田中貢太郎（桃葉）の案内での初探訪であった。田中は仁井田（高知市）の出身で、昭和初期に『旋風時代』で大人気を得た作家。桂

浜に、「田中桃葉記念碑」が建っている。

昭和32年建立「吉井勇歌碑」の「大土佐の海を見むとてうつらうつら 桂の浜にわれは来にけり勇」も感慨深い。東京で伯爵家に生まれ、歌人・劇作家として知られた存在だったが、妻の不貞による傷心を抱き、友人をたよって溪鬼荘（香北町）に隠棲。土佐の酒と自然に癒やされつつ5年ほど滞在、各地を訪問して「土佐百首」を残す。その後、京都に出て歌壇に復帰活躍する。ほかに、高知商業初代校長で漢詩人・横木黄木や、旧制高知高校の校歌および寮歌「豪気節」の碑もある。

漱石・寅彦師弟の碑とともに追加したい歌碑には、娘を土佐で亡くした紀貫之が浦戸を出る際に歌った「都へと思ふをものの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり」（『土佐日記』）と、江戸の斎藤唱水の和歌、そして詩人・野口雨情が桂浜水族館に贈った詩「黒潮は…」である。これら文学碑に音声ガイドをつけ、文人の心を癒やし、創作力を喚起した桂浜の魅力を現代人に気付かせ、俳句募集を恒例行事にはどうだろうか。

図2



明日への夢を育む城山からの大展望

風光明媚な浦戸湾の観光は、明治後期になって巡航船が潮江・農人町から種崎・御壺瀬・浦戸へ通うようになって、次第に盛んになった。昭和7年の「浦戸湾保勝会」、9年の「土佐観光協会」の発足、10年の土讃線開通、それを記念した12年の南国土佐大博覧会でさらに促進された。明治初年以來、県外客は大阪・神戸からの汽船しか来高できなかったが、待望の鉄道が開通した。バスも浦戸村まで通じ、17年には高知市に編入される。

これらに先立ち、桂浜には昭和3年に土佐の青年たちの奔走で「坂本龍馬銅像」が完成、昭和6年には漁業で財をなした永国亀齡によって「桂浜水族館」が開館した。以後この二つが浦戸湾・桂浜の景観に最もマッチした観光スポットとして、人気を得る。

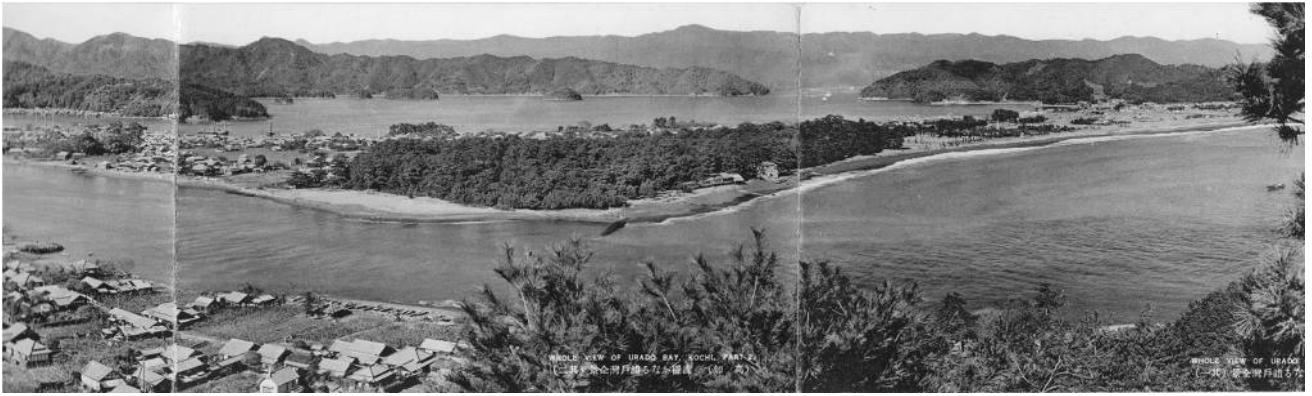


図 3

それまでは、浦戸湾の観光と言えば種崎が先行、外洋に面して松原が続く県立種崎千松公園は海水浴場で知られ、やがて潮湯・水族館・野球場・ゴルフ場も出来た。ところが、第二次世界大戦の開戦でこれら施設は全て取り壊され、戦後は再建できずに消えていった。さらに戦後の開発ブームで、浦戸湾東岸は全て埋め立てられ、潮干狩の名所だった種崎先端も削られてしまった。桂浜の龍馬像は、戦時中の金属供出もまぬかれ、再三の修復によって原型が守られている。本山白雲による野外彫刻の傑作であり、文化財指定を申請すべきだ。

桂浜には、昭和 8 年に永国家によって鉄骨木造の展望塔が城山に建てられたが、昭和 30 年に老朽化で取り壊された。昭和 33 年に、高さ 30 ㍎の鉄骨展望台がエレベーター付で再建された。

昭和 36 年刊『土佐風土記』（高知県文教協会）にはこう絶賛してある。「桂浜の美は、古くは龍王、龍頭の両岬にはさまれた箱庭式の景観であった。しかし、今日はそうではなく、後方小丘上に建てられた展望台上よりの大観である。ここからは、外洋のぼう洋たる姿や雲煙けぶる長汀を追いながら、室戸や足摺を遠望する雄大なながめと、重畳の四国山地を遠景に

図 4



して、浦戸の波静かな内湾を俯瞰するながめとを合わせもっている」。昭和後半、高知市民は竜宮祭や月見だけでなく、家族・友人の別離や慶事があると、この浜で絶景に抱かれて明日への夢を語り合い、しばしの宴を楽しんだ。

その後展望台は消え、昭和末期から平成にかけて浦戸城址の詰ノ段（本丸）周辺には観光道路が延び、国民宿舎や県立坂本龍馬記念館の近

代的な建築物がそびえ建った。一方、平成 7 年に発見された長さ百㍎に及ぶ長宗我部時代の浦戸城石垣遺構は埋め戻されてしまった。石垣の発掘復元と、駐車場になっている詰ノ段の史跡としての保存が望まれる。

図 5



今後は、高度成長期に浦戸湾で行われた狭島爆破や埋立てなど自然破壊の反省にたち、桂浜・浦戸湾のかけがえのない自然と史跡を野外博物館として整備、単に行楽地のみならず、子どもたちの郷土学習にも、大人の生涯学習にも活用したい。

外洋港と連動した国際観光地への脱皮も必要だ。まずは、桂浜最大の魅力である雄大な海のパンoramaを楽しめるよう、浦戸城天守台周辺に木造櫓を復元すべきだ。さらに桂浜公園地区への自動車乗入れを禁止、麓の駐車場で用意した電気バスで老いも若きも詰ノ段の櫓にまず案内し、絶景を楽しんだ後に、城郭遺構や記念碑を探訪しつつ浜へ降りる散策コースを設定したい。龍馬像・水族館・寺田記念海洋未来科学館（新設）を見学後は、砂浜に座して月の出を待ちつつ酒杯を傾げるのもよし、龍馬像を仰ぎ見て天下国家を語るのもよしだ。

（了）

<挿図キャプション・出典>

1. 「土佐藩御座船図」 高知県立歴史民俗資料館蔵（『江戸時代図誌 南海道』筑摩書房）
2. 「吸江図絵」上方に浦戸・種崎 橋本小霞画 高知県立図書館蔵（『江戸時代図誌 南海道』筑摩書房）
3. 波穏かなる浦戸湾全景（昭和初期の絵はがき・公文敏雄蔵）
4. 桂浜展望塔（昭和8～30年まであった・永国雅彦提供）
5. 浦戸城詰ノ段からの灯台と太平洋の眺望（筆者撮影）

坂本龍馬の「学び」と「志」を読む

中田 昌志

(先号で紹介した「龍馬・元親に土佐人の原点をみる」《中城正堯著、高知新聞総合印刷刊》を読んだ中田昌志氏(ボランティアグループ「森の中の高知駅」主宰者)に読後感および龍馬観を執筆いただいた。まず、同書の「中城家と龍馬」および「龍馬の学び」に注目し、さらに海援隊に見る「龍馬の志」と、自ら同行して感じた「孫正義氏の龍馬観」に強く共感を寄せていただいている。)

中城家と龍馬最後の帰郷

中城家は土佐藩御船頭(おふながしら)。幕末当主は中城直守(なおもり)(1812/1879)長男は中城直楯(なおたて)(1841/1909)であった。慶応元年(1865)中城直楯「大廻御船頭」(おおまわりおふながしら)継承が許された。長宗我部水軍は、山内家土佐入国とともに、その機能が土佐藩御船奉行に引き継がれ、種崎・仁井田に御船倉が置かれた。造船・海運など実務を担当する下級武士(下士)は、太平洋の荒波に通じた長宗我部以来の伝統を受け継ぐ船手衆(水軍)であり、中城家の先祖もその一員であった。大廻御船頭とは土佐から江戸へ直行する千石ほどの帆走藩船の船長格であり、小廻御船頭は大阪までと区別していた。共に下級武士、下士である。

中城直守は文政10年(1827)から明治10年(1877)まで50年間この激動の時代を「随筆」に手稿していた。今では大変貴重な歴史資料である。

坂本龍馬の乗った芸州(安芸)藩・震天丸が慶応3年(1867)年9月23日、種崎沖に現れたのをいち早く発見したのは、中城直守であった。「九月二十五日早朝、車輪船沖遠く来たり。而して錨を下す。午時(正午)柏渡合に入る。而して碇泊。芸州船の由」とある。

「才谷梅次郎・中島作太郎・小沢庄次等三人、使者の趣をもって上陸、夜に入り梅次郎二人吸江の亭に行く、渡辺弥久馬と対談ある由なるを、弥久馬故ありて来ず、金子平十郎来たれる由也…梅次郎は実は坂本龍馬なり。今この人、皇国周旋の事件に付きすこぶる名誉ありて海内の英雄ととなう」とある。

九月に入り、薩長は大政奉還を幕府が拒んだ場合にそなえて兵を上京させ、武力蜂起の準備をしていた。土佐藩にも建白書提出にとどまらず、武装強化・兵員上京という武力行使の準備を促すための帰国であった。龍馬は本来なら身を隠すには川島家に頼るところだが、安政の大地震の被害を受け川島家は仁井田へ移転していた。

そこで龍馬は幼馴染の直楯を頼ったのであろう。

龍馬は種崎から小舟で使者を出し、土佐藩の首脳と交渉、数度にわたる会見の末ついに九月二十七日土佐藩評定によって、大政奉還の決定と武力討伐に備えてのライフル銃千挺買い上げが決定した。

龍馬最後の帰郷は、大政奉還による近代日本誕生への最後の布石のためであった。幕府への土佐藩からの建白書提出には、拒否されないよう薩長とともに武装

蜂起も辞さない軍事態勢の誇示も必要だった。これは単なる土佐藩びいきの提案でなく、薩長のみでの討幕への暴走を防ぎ、王政復古をもととなえつつ、平和裏に近代国家建設を成し遂げるための妙案でもあった。

直楯は龍馬達を載せた小舟を種崎の<中の棧橋>に着けると、浦戸湾沿いの裏通りを進み、竹やぶの小道を抜けて中城家の離れに案内している。龍馬が潜伏して土佐藩との交渉に中城家をたよったのは、地の理、人目につかない離れ、移動手段には船と操船する優れた船頭、そして最も信頼できる幼馴染直楯がいたからと思われる。潜伏した離れは今も残されており、襖に貼り付けてあった浮世絵(複写)などが置かれていて、龍馬が此処にいたのだと実感させている。この襖や「随筆」など、中城家伝来の品々は高知市民図書館「中城文庫」に収蔵されている。

龍馬の学びこそ学びの原点

坂本龍馬は、郷土としては恵まれた家庭環境で、家族の指導のもと読み書き計算を自学自習で学び、そこから自ら学ぶ意欲と新しい課題にチャレンジする喜びを身に付け成長していった。学びの場は、日常生活を過ごす家庭・地域から、城下の剣術道場や鏡川での水練、さらに仁井田の砲術稽古、そして江戸の千葉道場・佐久間象山の塾、神戸・長崎へと広がっていった。次男として、懸命に自立の道を模索したであろう。この間、和歌を学び歌も詠んだが、現実とは遊離しがちな漢学・漢籍には深入りしなかった。

成長するに従い、川島春鷹や河田小龍、江戸では佐久間象山や勝海舟など、当時の最新の情報と学識を持つ人々に接していった。江戸で修行中には、黒船来航の警護で品川台場に動員された。このような現場体験の積み重ねが、神戸での海軍操練所開設や長崎での亀山社中・海援隊結成で、花咲くことになる。

なかでも青少年時代に、御船倉の周辺で見た活発な船の行き来や種崎・仁井田の沖に広がる太平洋の大海原は、大きな影響を与えたと思われる。船は江戸・上方はもとより、長崎・下関・薩摩などから、さまざまな物産と情報をもたらしてきた。情報の一端は中城直守が文政から明治期まで記した「随筆」でも知ることができる。龍馬は、長崎とも取引をしていた川島春鷹からの異国情報を、目を輝かして聞いたであろう。

寺子屋にはほとんど行かなくても、下級武士の次男という家庭環境のなかで自学自習をおこない、自らの

生活の場で学ぶ喜びに目覚めていったのであろう。

後に愚童と呼ばれた「龍馬の学び」にこそ、教科書中心の一斉授業とテストに明け暮れる学校教育への警鐘があり、今日の教育病理を克服する鍵があるようだ。（「龍馬・元親に土佐人の原点を見る」龍馬から現代教育への警鐘」82～84 ページ）

海援隊と龍馬の志

・株式会社海援隊は慶応元年(1865)長崎の一軒の借家で出発した。創立者は土佐藩脱藩の一介の浪人坂本龍馬である。だが龍馬は、維新史を飾った影の実力者でもあった。・元治元年(1864)30才、生まれてはじめて長崎の土を踏んだ龍馬は、一目でこの海を見下ろす町が気に入った。長崎の先は上海、外国の匂いがするのである。龍馬に一つの構想が浮かんだ。船を手に入れ、貿易や海上輸送で利益をあげ、軍艦を増やす。日本最大の私設艦隊を作って、討幕を実現しようというのである。

・慶応元年(1865)：勝海舟の海軍操練所の練習生を引き取り、亀山社中後の長崎海援隊を創設。アメリカには会社がある。その会社を作る。

出資者：福井藩・松平春嶽 勝海舟の紹介状を持って出資依頼

・春嶽：「お前の考えていることはおもしろい、株式会社やるのか」

・龍馬：「海運と貿易と、できれば文化事業もやります。出版事業、つまり啓蒙的出版事業もやります」
言う。春嶽：「根拠地はどこだ」龍馬「長崎だ」春嶽「それはおもしろい」と言って、金をだしてやって、おまけに越前藩士を何人かつけてやった。

・船借用：大洲藩・薩摩藩・長州藩現物出資、土佐藩も加わる。

・出資者：薩長土越前

・海援隊約規：凡そ嘗て本藩を脱する者、及び他藩を脱する者、海外に志或る者、この隊に入る。運輸、射利、開拓、投機、本藩の応援を為すを主とす。今後自他に論なく、その志に従って撰びて之に入る。

・月給：一律3両2分 隊長龍馬も同じ。

・平等主義：自分たちが日本の啓蒙的な仕事をするんだ、新しい日本は自分たちが作るんだという意識がある。

・統一国家・日本国を作らないと海運貿易事業の邪魔になる。

・明治国家：薩長のものであった。国家の目的は富国強兵であった。それ以外の人物たちは歴史の中の困りものに過ぎない。龍馬も攘夷家・富国強兵家、しかし共和思想の匂いの濃い人物だった。土佐は自由民権運動の収束で、官界・政界から去っていく。

・海援隊運営から見える龍馬

民主的な運営であり、龍馬の国家構想とつながっている。アメリカのような大統領をもつ国を考えていた

と思われる。当時としては乱臣賊子の思想だが、彼は一方でみごとなバランス感覚の持ち主でこの考えは外には出さない。出せば仲間へ殺される。龍馬の面白さは、討幕という事が片手間の仕事で最終目的でなかった。海援隊をつくったのは貿易のために、国内貿易だけでなく、世界貿易を狙っていた。薩摩・長州・越前藩を株主として株式会社をつくった。世界貿易には統一国家のバックがないと出来ない。そのための薩長同盟であり国内統一だった。龍馬の新しい国家構想『船中八策』は大政奉還、明治になって五箇条の御誓文に受け継がれ、議会創立や憲法制定につながった。

(参考：司馬遼太郎「司馬遼太郎の日本史探訪」)

孫正義「龍馬さんは人生の原点」



2010年11月15日ソフトバンクグループ孫正義社長は桂浜の龍馬の銅像に接し笑顔となった。秘書曰く、「孫社長の笑顔を見たのは数年なかった」と。孫さん曰く、「人生ですべき事は未だ半分にも達していない。坂本龍馬先生は人生の師である。ソフトバンク経営に龍馬の生き方を実践している。力を持たなければ誰も話を聞いてくれない・・・私心なき心が大切である」

孫社長15歳の時、恩師より“竜馬がゆく”を薦められ読破、アメリカ行きを決意。16歳の時父は病にたおれ入院、兄が学校をやめ働いて父の世話をしているときであった。親・兄弟・親戚から非難をあびていたが、アメリカへ脱藩。必ず事を成して帰国すると心に誓った。

「私は“竜馬がゆく”を読まなければ今日の私はない。人生の岐路にたった時、幾度となく読み返してきた」と、感涙。

2015年11月15日、龍馬さんは人生の原点というソフトバンクグループ孫正義社長は「何を置いても」と桂浜に駆け付けた一人である。

龍馬誕生祭180周年式典では、「僕がちっぽけな決断をすると『そんなのでいいの』と、言われそうです」と笑う。「龍馬さんは優しくて世界中で最も偉大な英雄、多くの人に『幸』になってほしいと願っていた・・・」と、愛される龍馬さんへ祝辞を述べた。

小学生から募った龍馬への手紙に、こうあった。「龍馬さんの魅力は『優しさ』です。また、命をかけて生きていました。龍馬さんの精神は、自由・平等・博愛、そして“私心のない生き方”で、いつも“人の幸せを願っていました”。“そこが大好きです”

ニューヨーク(NY) 便り

(秦ブランドコンサルティング株式会社代表取締役。土佐高3 1 回生)

秦 郷次郎

創刊 2 号が出て間もなく、旧知の柵野正士君から、次号に“ニューヨーク (NY) からのたより”のような形で何か記事を書いて欲しいという話があり、その時はまだ先の話と思い、気安く「何か考えます」と返事をしたものの、いざ次号出版の時期が近づくと何を書けば良いか戸惑っています。

NY 在住は 53 年振りです。1964 年米国のビジネススクールを卒業後、NY の会計士事務所に就職して以来でした。2011 年の東関東大震災を機に当時、3 歳の娘とハワイで誕生することになる長男を身ごもった妻（再婚）と共に、慌ただしくハワイに移住したのが、まるで昨日のように思い出されます。

前職であるルイ・ヴィトン在職中は 20 年以上、ルイ・ヴィトン ハワイの社長も兼務していた関係で年に 2・3 度はハワイを訪問した関係で、ハワイに住むことにあまり躊躇なくすんなりと引っ越しして来ました。ハワイに数年住み気が付くと、娘と息子二人共に大事な就学の節目の年齢となり、熟慮の結果、初・中等の教育環境が最も整っているとされている NY への移住を決めました。意識はしていませんでしたが、結局は東京、ホノルル、NY (マンハッタン) と孟母三遷となってしまうました。

NY 特にその中心マンハッタン区（ボロー、他のボローの例：ブルックリン、ブロンクス、クイーンズ等あり）は、50 数年前に比べると特に West Down Town（西南地域）の再開発は物凄いものがあり、文化、商業、住宅等全ての分野を総合した高層ビルが乱立の様相を呈しています。“トランプ”の名前を冠したビルも多数見受けられます。一極集中といわれる東京以上の勢いです。

現在、私共の住んでいる所は同じマンハッタンですが、大再開発中の West Down Town とは全く反対の方向で俗に Upper East と言われる住宅、私立学校の多い、比較的静かな地域です。学校への子供達の送迎は、雨風等天候の悪い時以外は歩いて 0 ~30 分位、運動には丁度良い位の所でラッキーです。休日はセントラルパークに近い美術館や近くの公園で現在 9 歳と 6 歳の子供達と時間を過しています。今年の夏の NY は例年に比べそれ程暑くなく、秋深まって来た今日この頃（10 月後半）は朝夕ひんやりしますが快晴の日が多く、過ごしや



すい季節です。NY は東京と比べると四季がよりはっきりしており、冬は雪もしっかり積もりますし、子供達は大変喜んで近くの公園でソリ等を楽しんでおります。

二人の子供達は、それぞれ女子校と男子校ですが学校が大好きで、友達も沢山出来、英語はローカルと少しも変わりませんが、毎土曜日の日本語学校ではやや苦戦をしております。小学 4 年の娘は漢字が嫌ですがこの所 2 回連続でテストは 100 点を取っており、少しほっとしております。大変ですがバイリンガル（二ヶ国語が出来る）は是非努力して続けてもらいたいと考えています。息子は幼稚園児ですが、最近将棋を覚え、毎日 2、3 局はせがまれ、こちらは少しくたびれ気味です。負けず嫌いで、大好きな飛車など取られると本気で泣き出します。ゴルフにも興味があり、早く一緒にまわれる日を楽しみにしています。

NY で特に目立つのは、多種多様な犬を飼い散歩させる人の多い事。クリーニング店とドラッグストアの多いこと、ベビーカーを押すベビーシッターの多い事等です。

私の体調は、5 月に受けた脳下垂体腫瘍の手術後の静養中で、未だ激しい運動等は出来ませんが、先日久しぶりにゴルフの練習をしたり、9 ホールのみ家族でプレーしたりと徐々に回復してきております。まあ今年一杯はこんなものでしょう。

同窓会等で 125 歳まで生きると公言したりした手前もあり、また何より子供達の成長を楽しみに元気で長生きしなければと考える今日この頃です。皆様もどうぞ御身体大切に。



イサキ 魚



オオニセ 魚



セウネウチ 魚



ウハメウチ水 魚



ハコブチ 魚



エビスウチ 魚



ツチホセリ 魚



ヒラスズキ 魚



クエ 魚



キロカシゴウチ 魚



コンウチ 魚



クサブチ 魚



ブリ 魚



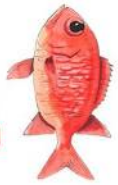
マダイ 魚



オウチ (ウチウチ) 魚



ユキカサリウチ 魚



アカマツカサ 魚



キハシラ 魚



アカメ 魚



トラウチ 魚



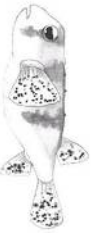
サザエ 魚



オウチ (ウチウチ) 魚



タチウオ 魚



イナダシラ 魚



カクレマン 魚



ウチウチ 魚



マコシロウチ 魚



ササニシキ 魚



ツバウチ 魚



ミナミウチ 魚



コトヒキ 魚



ウチウチ 魚



スナゴ 魚



クハシラ 魚



ササニシキ 魚



ウチウチ 魚



ウチウチ 魚



ウチウチ 魚



ウチウチ (ウチウチ) 魚



ウチウチ 魚



ウチウチ 魚



ウチウチ 魚



ウチウチ 魚



ウチウチ 魚



画: 楠瀬日奈

脊椎動物「進化」のお話

3 顎の進化(2)

哺乳類の顎の関節はそれ以外の脊椎動物とは全く異なった発生過程を示します。また、哺乳類の耳の奥、顎の関節の近くにはツチ骨、キヌタ骨、アブミ骨という3つの耳小骨がありますが、他の脊椎動物はアブミ骨のみです。この違いは何故かと言えば、爬虫類で顎の関節を構成していた下顎の関節骨と上顎の方形骨が、哺乳類では中耳のツチ骨とキヌタ骨に変わったためです。すなわち、哺乳類では、爬虫類の顎の関節をつくっていた2つの骨が耳小骨に転用され、もともとあったアブミ骨とあわせて3つの耳小骨を持つようになったことで、聴覚が格段に発達したのです。密度が空気の1000倍の水中に住む魚類は音の伝導器官をそれほど必要とせずアブミ骨のみで充分であったと考えられています。生物はもともとある器官を転用することで、必要とする新たな器官を生み出します。哺乳類では、聴覚の発達と併行して二次的に独自の顎関節(側頭骨と下顎骨)が形成されています。哺乳類という名称の意味は、母乳を飲む(そのために口腔を陰圧にする口蓋を有する)動物とされてきましたが、現在は3つの耳小骨を持つことが哺乳類の定義とされています。

戸田善久(土佐高31回生)

ハマスイ(桂浜水族館)たより

あたらしい仲間たちのエサやり体験の紹介

* 待望のカピバラのエサやりが11月からスタート。



8月に仲間入りしてまだ日が浅いですが、すっかり慣れて愛嬌ふりまいてすごい人気です。

* リクガメさんのエサやりタイムが始まりました。

4月からスタート。11:40 リクガメタイム。「ダイ」

ちゃんと「ロク」ちゃんに仲良くなれるチャンスタイムです。



* おらんくの池でもエサやり体験スタート

おらんくの池でいろいろな魚たちと、海水に漬かりながらの渚遊びはファミリーに大人気です。しかし寒い時期ではこの遊びには気後れがちで魚たちへのお食事体験を10月から始めました。

桂浜水族館 HP での SNS が面白い!!

ハマスイスタッフの賑やかな、面白い、情報を お楽しみください。

外国人観光客の動向

* クルーズ客船の入港

高知港に昨年からはクルーズ船の入港が始まり、年30~40隻が寄港しています。主に中国方面からのお客が多い。桂浜にも訪れ、早朝から浜が埋もれる程の来浜者もたびたびです。

* 水族館インバウンド

香港、台湾系海外観光会社の団体客の入館がコンスタント続いている。嬉しくて、ペンギンふれあいなどの特別サービスと、にわか言葉でもてなしています。

★ 会員募集中

「桂浜を守り育てる会」の会員募集を行っています。希望者は下記事務局にお問い合わせください。住所 〒781-0262 高知市浦戸 778 桂浜水族館内「桂浜を守り育てる会」事務局 担当 永国雅彦 TEL 088-841-2437 FAX 088-841-2451 MAIL ma.nagakuni@nifty.com

☆ 編集後記

わたくしは本会報の編集を創刊から4号担当した。この間編集者として心ひかれる絵がある。それは、題字「桂浜たより」の背景画である。龍王宮を右手に見る桂浜の浜辺でアシカの親子がはるかかなたの海を眺めている風景である。

この絵には詩がある。描いたのは桂浜水族館職員楠瀬日奈さんである。今回、日奈さんには桂浜水族館の魚たちをたくさん描いてもらった。日奈さんは画家であり詩人である。ひとの心を揺さぶる。今回秦郷次郎君に無理を言って、特別にニューヨーク便りを寄せてもらった。秦君は土佐高31回生で日本脱藩して世界に飛び出して活動しているわが国が世界に誇る国際人である。NYでの秦一家の写真が微笑ましい。

(たなの・まさし)

桂浜たより第四号

2017年12月発行(年2回 6月・12月発行)

発行 桂浜を守り育てる会(桂浜水族館応援団)

〒781-0262 高知市浦戸778桂浜公園

公益社団法人 桂浜水族館内

電話 088(841)2437 FAX 088(841)2451

題字背景画 楠瀬日奈

編集・印刷 (株)Reproduction